

日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(1)

北 條 礼 子*
(平成8年4月24日受理)

要 旨

日本人 EFL 学習者が外国語(英語)を学習するときに用いている学習方略を検討する調査票を開発するため、まず欧米の先行研究で用いられていた英語学習に対する態度を調べる項目を翻訳した。その上でこれらの項目が日本人が対象者である場合に適当であるかどうかを確認するため、1994年4月に本学1年生計199名を対象に調査を実施した。本研究で扱った調査項目は3部構成であり、授業中の態度に関する14項目、一人で勉強するときの態度に関する15項目、授業以外の場での態度に関する24項目から成る計53項目であった。全データは集計後、因子分析を行い、3部のそれぞれにつき3, 3, 4因子を抽出し、また53項目のうち5項目が不適当な項目であることが明らかになった。

KEY WORDS

学習方略 learning strategy 態度 attitude
英語科教育 English education 語学教育 language education

1. 研究の背景

外国語(英語)教育の分野において、伝統的に教師側からの研究アプローチが多く、指導方法の工夫・改善や教材の提示方法が研究のテーマとなってきた。しかし、国内では1980年代に入ると、教育目標として自己教育力の伸張と個人差に応じた教育の推進が掲げられ、学習者個人個人の特性を明らかにすると同時に英語の学習成果の向上を目指すようになった。

ところで、言語学習における学習者特性の据らえ方は多岐多様であるが、Skehan (1989)は個人差という観点から、学習方略、学習スタイル、適性、機動付けをとりわけ重要な学習者特性であると指摘している。最近、外国語教育の分野における国内外の諸研究をみると、学習方略一般ばかりではなく、リーディング、リスニングまたはコミュニケーションなどの範囲を限定した上でさまざまな方略に関する研究が盛んである。さらに、国内での学習方略の研究では、用いられている調査票は、Oxford (1990b)の Strategy Inventory for Language Learning (Ver. 7.0)に代表されるように、欧米で開発された調査票の翻訳版である(Watanabe,1991)。つまり、現在までのところ、日本人 EFL 学生の英語学習における学習方略を包括的に調査する調査票が開発されている段階には至っていないと考えられる。このような状況の下、日本人 EFL 学習者の学習方略研究にあたり、まず急務であると考えられる課題は、研究対象者に合った学

* 言語系教育講座

習方略の調査項目の選定であろう。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、これまで欧米で英語学習に対する態度を調べる項目として紹介されている調査項目を用いて、日本人 EFL 学習者の英語学習に対する態度を検討することである。第二の目的は、今回用いた調査項目が、日本人 EFL 学習者の学習方略を調べるための調査票項目として適当であるかどうかを検討することである。

3. 研究の方法

3.1 対象者：本学1年次生199名

3.2 測定具：2～7部については、Horwitz (1985), Politzer & McGroarty (1985)が用いた調査項目を参考にし、筆者が日本人学習者が被験者であることを念頭において翻訳して作成したアンケート。日本語表現については、英語の現職教員2名に内容が理解しにくい表現について指摘を受け修正した。アンケートの構成は以下のとおりである。

1部：英語学習経験や意識について質問する10項目

2部：英語学習の知覚の好みについて質問する6項目

3部：英語学習に対する信念に関する27項目

4部：英語学習に対して抱いている信念に関する27項目

5部：英語の授業中の態度に関する14項目

6部：自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目

7部：授業以外の場で英語を勉強するときの態度に関する24項目

今回の研究では特に5, 6, 7部の結果を検討する。

3.3 調査実施時期：1994年4月

3.4 手続き：約20分の実施時間で、集団調査を行った。本研究で扱う部分について述べると、回答形式は5部～7部は「1. まったくそうしない, 2. めったにそうしない, 3. どちらでもない, 4. ときどきそうする, 5. いつもそうする」の5段階であり、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：因子分析

4. 研究の結果

4.1 英語の授業中の態度に関する14項目

4.1.1 平均値・標準偏差

英語の授業中の態度に関する14項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まった

くそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表1は各項目の内容と平均、標準偏差を示したものである。平均±標準偏差の差が得点範囲(1-5)を項目8が越えていたが、その内容が、日本人EFL学習者に特有なものであると判断したので、今回は因子分析の対象からはずさないこととした。

表1 英語の授業中の態度に関する14項目の評定得点の平均と標準偏差(N=199)

項目	平均値	SD
1. 他の学生が間違ったと気付いたら頭の中で自分で正しい答えを言ってみる	4.08	0.66
2. 先生があなたを指名しなくても頭の中で答えを言ってみる	4.12	0.72
3. 話し手の動作や表現から文の意味を推測する	3.82	0.96
4. もし先生の言っていることが理解できなかったらもう一度言ってくれるように頼む	3.02	1.18
5. 文や語句が習った文法の例であるかどうか先生に質問する	2.33	0.84
6. 自分が間違ったと気付いたら、自分のしていることを中断する	3.59	0.83
7. 先生に質問すると授業を中断させるので、自分で分からない語句を繰り返したりして勉強する	3.21	0.83
8. 日本語でクラスメートに話しかける	4.64	0.72
9. もし授業中、許されていれば、クラスメートの間違いを訂正する	2.51	0.98
10. 例文や見聞きして自分が知っていると思う規則について推測することは避ける	2.79	0.63
11. ある規則について例外があることに気付いたら、先生に説明を求める	3.16	1.02
12. ある表現が、いつ、誰によって用いられるのかについて先生にたずねる	2.36	0.88
13. 正解であると確信がもてる時だけ質問に答える	3.43	0.93
14. 知らない新出単語があったら、それが用いられている文全体からその意味を推測する	4.02	0.87

4.1.2 因子分析の検定結果

英語の授業中の態度に関する14項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。その結果として、再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に3因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表2に示すとおりである。

因子の解釈にあたり、基本方針として、表2の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。表1、2より、項目の内容をみると、まず因子Iには項目5、12、11、4、9の5因子が含まれていた。因子Iの項目内容をみるとほとんどが、教師に質問する内容であったので、「教師への積極的質問」と命名した。次に、因子IIは項目2、1、14、3の4因子が示すように、頭の中で意味を推測する態度を示していると考えられるので、「意味の推測」と命名した。また、因子IIIには項目6、7、8、13の4因子が含まれていた。このうち因子8は、英語の授業中日本語でクラスメート

表2 バリマクス回転後の因子パターン (英語の授業中の態度)

	因子 I	因子 II	因子 III	共通性
項目 5	0.7522	-0.0279	0.2285	0.6188
項目 12	0.7188	-0.0034	-0.0627	0.5207
項目 11	0.6964	0.0972	-0.0271	0.4951
項目 4	0.5793	0.2312	-0.1166	0.4027
項目 9	0.5366	0.1874	-0.1984	0.3625
項目 2	0.1246	0.7423	0.0328	0.5676
項目 1	0.1019	0.7100	0.0283	0.5153
項目 14	0.0236	0.5908	0.0757	0.3552
項目 3	0.3037	0.5641	-0.0998	0.4204
項目 6	0.0003	0.2888	0.7233	0.6066
項目 7	0.0224	-0.0694	0.6405	0.4156
項目 8	-0.1234	0.2307	0.5817	0.3615
項目 13	-0.0998	0.2307	0.4105	0.2317
項目 10	0.0338	-0.2318	0.2983	0.1439
説明分散	2.3365	2.0243	1.6568	6.0175

(注) 枠囲いされた数値は0.40以上

に話しかける, という英語を用いることを避けるともいえる態度であるが, その他の項目は, 自分が質問すると授業を中断させるので自分でわからない語句を繰り返したりして勉強する, という周囲への配慮であり, また正解であると確信がもてる時だけ質問に答えると言う, 遠慮したり, 自分の行動に対して慎重な傾向を説明していると考えられるので, 「慎重な配慮」と命名した。最後に, 以上の因子に含まれない項目があったが, それは項目10の「例文や見聞きして自分が知っていると思う規則について推測することは避ける」というものであった。

4.2 自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目

4.2.1 平均値・標準偏差

自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目の得点をそれぞれ集計し, 平均値と標準偏差を求めたものが表3である。

4.2.2 因子分析の結果 (15項目)

自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目の得点について, 共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し, 後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。その結果として, 再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後, 各項目の因子負荷量を得た。次に3因子の解釈にあたり, 回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表4に示すとおりである。

因子の解釈にあたり, 基本方針として, 表4の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。表3, 4より, 項

表3 自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目 (N=199)

項目	平均値	SD
1. 単語や語句を勉強するとき、自分自身で実際に口に出して言うしてみる	3.96	1.01
2. 長文を読んでいるとき、知らない単語の意味を辞書で引く前に、文全体の意味を考えてみる	3.83	1.00
3. 英語と日本語の違いを考え、その結果として間違わずにすむことがある	2.85	0.82
4. 文章は文法の規則で分析せずに、できるだけそのまま暗記する	2.79	0.99
5. 辞書で単語をよく引く	4.32	0.83
6. 辞書で単語を引くとき、その語が使われている例文をいつも見る	3.68	1.08
7. 辞書で単語を引いたら、その語を口に出して発音してみる	3.49	1.19
8. 長文を読むとき、全体を読む前にわからない単語の意味を調べてその意味を長文の横に書く	3.21	1.28
9. 自分自身の発音を注意深く聞いて、直そうと努力する	3.10	1.09
10. 意味や発音などにより、単語をグループ化することで単語を暗記する	2.45	1.04
11. これまで勉強した単語を、単語カードや単語リストを用いることにより整理している	2.49	1.16
12. 単語や語句を暗記するとき、英語の他の単語・語句や絵・行動というより、日本語と関連づける	3.19	1.04
13. 授業で聞き逃した単語や文法について、授業以外の時間に勉強したり、練習する	3.34	0.94
14. 自分に向かって英語で話してみる	1.73	0.86
15. 自分がしている行動や自分が見た物について英語で説明できるかどうか時々試してみる	1.97	0.99

目内容を見ると、因子Iには項目15, 14, 9, 7の4因子が含まれていたが、項目内容はすべて英語を勉強するとき、英語を口に出してみるという、音声化に関する内容であったので、「音声化学習」と命名した。次に、因子IIは項目5, 13, 11, 6の4因子が含まれていた。項目内容を見ると、英単語を学習するときに辞書を引いたり、単語カードなどを利用するという英単語学習に関する内容であったことから、「英単語辞書引き学習態度」と命名した。また、因子IIIには項目8, 4, 12, 2の4因子が含まれていた。この4項目のうち、項目2は項目内容が逆に解釈されるため、結局項目8, 12, 2の3項目は英単語や文を日本語の意味と直接結びつけ、項目4が英文をそのまま暗記するという態度であったが、因子IIIが項目8, 4を強く支配するとの知見から、「日本語の意味利用」と命名した。最後に、因子に含まなかった項目を見ると、項目10, 3, 1であった。項目内容から、明らかになったことは、単語や語句を勉強するとき口に出してみたり、わざわざ意味や発音によるグループ化をして暗記する傾向や、英語と日本語の違いを考えながら勉強する傾向はみられない、ということであった。

4.3 授業以外で英語を勉強するときの態度に関する24項目

4.3.1 平均値・標準偏差

授業以外で英語を勉強するときの態度に関する24項目の得点をそれぞれ集計し、平均値と標準偏差を求めたものが表5である。

表4 バリマクス回転後の因子パターン（自分一人で英語を勉強しているときの態度）

	因子 I	因子 II	因子 III	共通性
項目15	0.7782	-0.0199	0.0463	0.6082
項目14	0.7697	-0.0876	0.0273	0.6009
項目9	0.7151	0.2458	0.0455	0.5738
項目7	0.4814	0.3896	-0.2958	0.4711
項目10	0.3800	0.0990	-0.0097	0.1543
項目5	-0.0966	0.7171	0.0187	0.5239
項目13	0.1957	0.6411	0.0977	0.4588
項目11	0.0448	0.6284	-0.0926	0.4054
項目6	0.1681	0.5416	0.0239	0.3222
項目8	0.1051	0.2143	0.6257	0.4485
項目4	-0.0237	-0.0194	0.5688	0.3245
項目12	0.1531	0.1998	0.4210	0.2406
項目3	0.3436	0.1490	-0.3585	0.2688
項目1	0.3368	0.0936	-0.3677	0.2574
項目2	0.1130	0.2766	-0.6416	0.5009
説明分散	2.4428	2.0371	1.6793	6.1592

(注) 枠囲いされた数値および下線を引いた数値は0.40以上

4.3.2 因子分析の結果（24項目）

授業以外の場で英語を勉強するときの態度に関する24項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。その結果として、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表6に示すとおりである。

因子の解釈にあたり、基本方針として、表6の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。表5、6より、項目の内容をみると、因子Iは項目7、11、24、9、17、23、12の7因子が示すように、学習した英文を有効にかつ積極的に用いてコミュニケーションを図ろうとする学生の態度を示すものと考えられる。従って、「学習成果積極利用」と命名した。次に、因子IIは項目2、14、1、3、16、4、5、8の8因子が示すように、人と関わりながら、自分の意図が英語でうまく相手に伝わらない場合でも工夫して、相手とコミュニケーションをしようとする「積極的コミュニケーション」と命名した。また、因子IIIは項目20、19、21から明らかなように英語学習のために、テレビ、ビデオ、映画、ラジオを利用するという態度を示しているのので、「メディア利用」と命名した。さらに、因子IVであるが、因子15、18、6、10、13が含まれたが、英語で話すことが苦痛な場合、そのような機会を避けるという態度を示していると思われ、「苦痛を伴う英語使用」と命名した。最後に、以上の因子に含まれなかった項目があったが、項目22であった。項目22の内容は、「英語で何かを言おうとするとき、英語で既に知っている文章をまず考え、それから状況に合うように必要なら修正する」というものである。

表5 授業害の場で英語を勉強するときの態度に関する24項目 (N=199)

項目	平均値	SD
1. ある考えを英語でどのように表現してよいかわからないとき、先生や友人に助けを求める	3.74	0.96
2. 自分の言うことを相手がわからないとき、自分の言ったことを別の言い方で言ってみる	3.52	0.97
3. 自分の言ったことが文法的に正しいかどうかわからないとき、他の人の確認する	3.82	0.88
4. 自分が間違ったと気付いたら自分の間違いを訂正する	4.25	0.75
5. 相手の言っていることがわからなかったら、相手にもう一度繰り返してくれるように頼む	4.11	0.82
6. たとえわからなくても、わかっているフリをする	3.03	1.00
7. 暗記した文章を、会話のとき使う	2.77	1.01
8. 顔や体の表現やジェスチャーから、相手の言っている意味を推測することがよくある	3.71	0.88
9. 他の人に話しているとき、自分の使っている表現や文が、勉強した規則に合っていることに気付く	2.97	0.87
10. 英語で間違いより黙っている方が賢明だと感じる 때가時々ある	3.02	0.99
11. 会話を続けるのに、これまで勉強したり暗記した文を使うことがある	3.25	0.98
12. 新しい語句や文を勉強しているとき、それまで習った文法の規則に合わないようだと思うことがある	3.39	0.78
13. 英語で何かを言おうとするとき、たいてい、言いたいことをまず日本語で考え、それから英語になおす	4.17	0.81
14. 言いたいことがうまく相手に伝わらないとき、ジェスチャーを用いる	4.05	0.89
15. 外国語で話すという精神的苦痛のため、自分を英語を用いる状況におくことを避ける	3.40	0.99
16. 相手が自分の発音を理解しなかったら、相手がわからなかった単語や語句のスペルをいう	3.55	0.97
17. 会話をするとき、授業で習ったばかりの単語や文章を使って見ることがよくある	3.05	0.95
18. パーティなど人との集りに参加するとき、可能な限り、日本語を話す人と話そうとする	3.68	0.87
19. 英語の勉強になるから、という目的で映画を見る	2.42	1.12
20. 英語の勉強になるから、という目的でテレビやビデオをみる	2.47	1.12
21. 英語の勉強になるから、という目的でラジオを聞く	2.23	1.09
22. 英語で何かを言おうとするとき、英語で既に知っている文章をまず考え、それから状況に合うように必要なら修正する	3.29	0.92
23. 英語を練習するという目的で、誰かと話しをしたことがある	2.51	1.18
24. 自分の好きな話題や使いたい表現が使える会話に意図的のもっていったことがある	2.50	0.98

表6 バリマクス回転後の因子パターン (授業以外の場で英語を勉強するときの態度)

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
項目 7	0.8091	0.0331	0.0352	-0.0870	0.6645
項目 11	0.7522	0.1261	0.0980	-0.0244	0.5918
項目 24	0.6377	0.0760	-0.0020	-0.0837	0.4195
項目 9	0.5778	0.2803	-0.0657	-0.0559	0.4199
項目 17	0.5766	0.1523	0.1878	-0.1038	0.4018
項目 23	0.4981	0.1412	0.2601	-0.3143	0.4345
項目 12	0.4247	0.1001	-0.0465	0.1977	0.2316
項目 22	0.3704	0.0083	0.0075	0.1412	0.1572
項目 2	0.0755	0.6917	0.0052	-0.1752	0.5148
項目 14	-0.0497	0.5885	0.0232	-0.0610	0.3531
項目 1	0.0843	0.5738	-0.0168	0.1522	0.3598
項目 3	0.2547	0.5559	0.0073	0.3360	0.4869
項目 16	0.1661	0.5336	0.0555	-0.0889	0.3232
項目 4	0.1114	0.5330	-0.0727	0.2327	0.3560
項目 5	0.1766	0.5320	0.0136	-0.0363	0.3157
項目 8	0.0592	0.5299	0.1753	-0.1349	0.3332
項目 20	0.0670	0.0423	0.9244	0.0014	0.8608
項目 19	0.0679	-0.0057	0.9157	-0.0492	0.8455
項目 21	0.0720	0.0768	0.7927	-0.1213	0.6541
項目 15	-0.3289	0.0981	-0.0081	0.7072	0.6180
項目 18	0.0557	-0.0617	-0.1799	0.6104	0.4118
項目 6	0.0789	-0.0543	-0.0454	0.5357	0.2983
項目 10	-0.0450	-0.1571	-0.0001	0.5257	0.3030
項目 13	-0.0003	0.1764	0.0328	0.5107	0.2930
説明分散	3.1477	2.8301	2.5173	2.1528	10.6479

(注) 枠囲いされた数値は0.40以上

5. 研究の考察

5.1 英語の授業中の態度について

英語の授業中の態度についてのそれぞれの因子が解釈された内容を一覧すると、以下のようになった。

因子 I : 教師への積極的質問

因子 II : 意味の推測

因子 III : 慎重な配慮

つまり、学習者の英語の授業中の特徴的な態度として指摘できるのは、わからないことや確かめたいことがあったら教師に説明を求めること、頭の中で意味を推測すること、周囲の邪魔になることを気にすること、英語を用いるのをためらったり、避けたりすることであることが

わかった。以上から、英語の授業のとき、頭の中で英語の意味を考えるなど、周囲の邪魔にならないように配慮しながらも、必要とあれば教師に質問する学習者の姿が感じ取れる。

5.2 自分一人で英語を勉強しているときの態度について

自分一人で英語を勉強しているときの態度についてのそれぞれの因子が解釈された内容を一覧すると、以下のようになった。

因子Ⅰ：音声化学習

因子Ⅱ：英単語辞書引き学習態度

因子Ⅲ：日本語の意味利用

つまり、英語を一人で勉強するときの典型的学習態度として指摘できるのは、英単語を辞書でよく引いて、その際その単語を口に出して発音してみること、また単語カードなどを利用したり、日本語の意味と結びつけて単語を暗記することであった。ここでこの3因子の共通点を考えると、単語学習に重点がおかれていることであろう。日本人は英文読解学習においてボトムアップ処理が多いことが実証的にも確かめられているが(飯島, 1993)、傾向を改めて支持する結果であると考えられる。

5.3 授業以外の場で英語を勉強するときの態度について

授業以外の場で英語を勉強するときの態度についてのそれぞれの因子が解釈された内容を一覧すると、以下のようになった。

因子Ⅰ：学習成果積極利用

因子Ⅱ：積極的コミュニケーション

因子Ⅲ：メディア利用

因子Ⅳ：苦痛を伴う英語使用

つまり授業以外の場で英語を勉強するときに特徴的な態度として指摘されたのは、学習した英文を有効にかつ積極的に用いてコミュニケーションを図ろうとしたり、自分の意図が英語でうまく相手に伝わらない場合でも何とか工夫して相手とコミュニケーションをしようとする、積極的な態度であることが明らかになった。さらに、英語学習のために、テレビ、ビデオ、映画、ラジオを利用することも示された。しかし、その反面、英語で話すことが苦痛な場合、そのような機会を避けるという傾向があることを示していた。以上に共通するのは、英語で話すことを苦痛であると感じながらも、メディアを利用して英語を勉強し、相手がある場合は工夫をこらして積極的にコミュニケーションしようという態度であると考えられる。

5.4 本研究で用いた調査項目について

最後に、本研究で用いた調査項目から日本人EFL学習者の学習方略を調べるための項目を選定するにあたり、まず削除すべき項目について検討する。

第一に、英語の授業中の態に関する14項目のうち、因子に含まれない項目は1項目あったが、それは項目10の「例文や見聞きして自分が知っていると思う規則について推測することは避ける」という内容であった。次に、一人で英語を勉強するときの態度に関する15項目のうち因子に含まれなかった項目をみると、項目10, 3, 1の3項目であった。項目内容から、明らかになったことは、単語や語句を勉強するとき口に出してみたり、わざわざ意味や発音によるグ

ループ化をして暗記する傾向や、英語と日本語の違いを考えながら勉強する傾向はみられない、ということであった。最後に、授業以外の場で英語を勉強するときの態度について因子に含まれなかった項目があったが、項目22の1項目であった。項目22の内容は、「英語で何かを言おうとするとき、英語で既知っている文章をまず考え、それから状況に合うように必要なら修正する」というものである。

以上の削除すべき項目内容をみると、単語や語句を勉強すると意味や発音など自ら単語をグループ化することや、英語と日本との違いを考えてみたり、また英語で何か言おうとするときにも英語をまず考えてそれを修正したり工夫したりする、といういわば自分で考えてみたり工夫したり、という積極的工夫関する内容であると考えられる。

最後に、本研究の結果をみると、ここであげられた項目以外は、日本人 EFL 学習者の学習方略を調査するための項目として用いることができるものと判断された。

引用・参考文献

- Bacon, S. M., & Finnemann, M. D. 1990. A Study of the Attitudes, Motives, and Strategies of University Foreign Language Students and Their Disposition of Authentic Oral and Written Input. *Modern Language Journal*, 74, iv, 459~473.
- Brown, D. B. 1994. *Principles of Language Learning and Teaching*. 3rd. ed. Prentice Hall.
- Donato, R., & McCormick, D. 1994. A Sociocultural Perspective on Language Learning Strategies: The Role of mediation. *Modern Language Journal*, 78, iv, 453~464.
- Green, J. M. & Oxford, R. 1995. A Closer Look at Learning Strategies, L2 Proficiency, and Gender. *TESOL Quarterly*, 29, 2, 261~297.
- Iijima, H. 1993. *A Study on the Effects of Pre-Reading Activities on EFL Reading Comprehension*. Unpublished MA thesis. Joetsu University of Education.
- MacIntyre, P. D. 1994. Toward a Social Psychological Model of Strategy Use. *Foreign Language Annals*, 27, 2, 185~195.
- McDonough, S. H. 1995. *Strategy and Skill in Learning a Foreign Language*. Edward Arnold.
- Ogino, K. 1994. *A Study of Learner Characteristics of Japanese EFL Junior High School Students: Learning Style, Strategies, Motivation and Gender*. Unpublished MA thesis. Joetsu University of Education.
- O'Malley, J. M. & Chamot, A. U. 1990. *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge.
- Oxford, R. L., Crookall, D., Cohen, A. D., Lavine, R. Z., Nyikos, M., & Sutter, W. 1990a. Strategy Training for Language Learners: Six Situational Case Studies and a Training Model. *Foreign Language Annals*, 22, 3, 197~216.
- Oxford, R. L., 1990b. *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*. Heinle & Heinle Publishers.
- Parry, T. S. & Stansfield, C. W. (Eds.) 1990. *Language Aptitude Reconsidered*. Prentice Hall.

- Politzer, R. L., & McGroarty, M. 1985. An Exploratory Study of Learning Behavior and Their Relationship to Gains in Linguistic and Communicative Competence. *TESOL Quarterly*, 19, 1, 103~124.
- Rost, M., & Ross, S. 1991. Learner Use of Strategies in Interaction: Typology and Teachability. *Language Learning*, 41, 2, 235~73.
- Skehan, P. 1989. *Individual Differences in Second-Language Learning*. Edward Arnold.
- Sparks, R. L., & Ganschow, L. 1991. Foreign Language Learning Differences: Affective or Native Language Aptitude Differences? *Modern Language Journal*, 75, 1, 3~16.
- Watanabe, Y. 1991. Classification of Language Learning Strategies. *International Christian University Language Research Bulletin*, 6, 75~102.
- Wenden, A. & Rubin, J. 1987. *Learner Strategies in Language Learning*. Prentice Hall.
- 1991. *Learner Strategies for Learner Autonomy*. Prentice Hall.

A Study of Learning Strategies Used by Japanese EFL Students (1)

Reiko HOJO*

ABSTRACT

The purpose of this study was to gain basic data for developing questionnaire items which investigate learning strategies used by Japanese EFL students.

Data were gathered from 199 university freshmen in April of 1994, using the questionnaire consisting of three sections, with a total of 53 items. The data were analyzed by factor analysis.

The analysis extracted ten factors among 53 questionnaire items, while five items proved to be unsuitable for inquiring learning strategies used by Japanese EFL students.

* Division of Languages: Department of Foreign Languages